



中原中也

記念館

館報

1996
創刊号

目次

- 創刊ご挨拶…………… 福田百合子… 1
- その志明らかなれば
— 館報発刊によせて— 佐藤泰正… 2
- 運営協議会
- 寄稿「末黒野」余聞… 和田 健… 3
- 中也の軌跡Ⅰ・Ⅱ…………… 4
- 収蔵品ピックアップ…………… 4

- 中原中也記念館の記録…………… 5
- 寄贈・寄託資料…………… 5
- キイワードは「中也」… 竹花京子… 6
- 聞き語り「中也ゆかりのひとびと」… 7
- 点訳図書の特贈…………… 7
- お知らせ…………… 8



創刊ご挨拶

中原中也記念館

館長 福田百合子

中原中也生家の隣接地、中原医院跡に、記念館が発足したのは、平成六年二月のことです。早いもので、もう二年が経過しました。

その間にいただいたご支援の数々は枚挙にいとまがありません。ご遺族、縁故の方々には勿論、未知の皆様からも多くの資料をお寄せいただき、ご助言を賜りました。

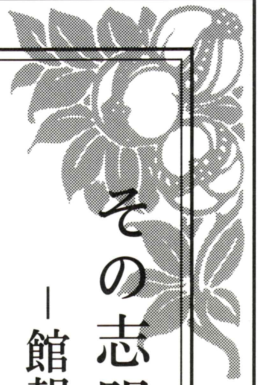
四月二十九日の生誕祭、十月二十二日の命日前後の特別企画展、中也詩を契機とした舞台や展示などの多彩な行事も鮮烈なイメージを留めています。中也記念館のこれらの足跡を記し、また今後の展望も含め、中也をゆかりとした交流の輪を広げたいと念願致しまして、館報発行

の運びとなりました。どうぞ今後共、よろしくご教示、ご指導下さいませ。

中原中也の第二詩集『在りし日の歌』の中の「早春の風」に歌われた風が、ここ山口市湯田温泉の一角には、今日も吹き渡っています。

けふ一日また金の風
大きい風には銀の鈴

ふるさと山口の風と光りを心に受けとめ、中原中也記念館へお立寄りいただきますようお願い申し上げます。館報創刊のご挨拶と致します。



その志明らかなれば —館報発刊によせて

運営協議会



長 泰 正
会 藤 佐

中原中也記念館が生まれて、この二月でまる二年。その間の来館者の数は十二万人。また懸案の中原中也賞の第一回も十八歳の神戸の高校生という、実にさわやかな受賞であった。これらを思えばまことに順調な歩みだが、しかし我々に残された課題はこれからである。

今からちょうど三十年前の昭和四十年六月、この記念館のある生家に近い井上公園に、あの『帰郷』の一節を刻んだ詩碑が建った。除幕の日、夜来の雨に洗われたすがすがしい黒御影の碑面を眺め、混声合唱で唱われた『帰郷』の歌声を聴きつつ、私は思わず涙のじむのを覚えた。晩年、この「肉感に乏しい関東の空の下にはくたびれました」と言い、故郷の地に帰れば、「また息を吹返すかも知れない」と言いつつ、ついにその願いは届かず、今こうした形でひとつの『帰郷』が果たされたことを思えば、涙なきをえぬものがあつた。

いまは亡き中原の母堂のフクさんや、

弟さんの思郎さんが元気な頃は、いくたびか伺つたものである。あの子の寄こした葉書や手紙はどれも金の催促ばかりで、これはあの子の恥だと、死んだあと殆ど焼いてしまいましたと、フクさんは言われる。しかしあの除幕の日、ひとりフクさんはその位牌の前で、ほんとうはお前が一番親孝行だったかもしれないと、涙しつと呼びかけられたという。そうしてさらに三十年、その生家の地に記念館が生まれたことは、まさに第二の『帰郷』ともいべき所であろう。ただ生家の跡という、そのゆかりは深い、敷地は狭く建物もおのずから限定されていることがまことに惜しい。

の近代詩の未来を、また可能性を問うこととなる。我々の願いはこの記念館が文字通り、この近代第一等の詩人を記念するにふさわしい充実を期すことであり、第一には資料の徹底した蒐集、整備であり、第二には随時の企画展の開催、セミナー、講演などによる研修、普及の活動である。近く「中原中也研究」第一号も刊行の予定であり、「中原中也の会」(仮称)もまた準備されつつあるが、これらは角川書店の新全集の刊行などもあいまって、その成果は大いに期待することが出来よう。この四月には山口市文化振興財団の発足とともに記念館もこれに包摂され、その活動はさらに充実したものとなる。幸い今日まで山口市当局のみならず熱意と理解によつて、物心ともに大きく支えられたことはまことに有難いことである。また館の運営にあたっては館長以下少数ながらよきスタッフに恵まれ、すぐれた研究者、詩人を軸とし、地元の人代表者も加わる運営協議会では、常に熱心な協議とともにまた新たな展望が逐次生まれつつある。中原家はもとより多くの知友、支援者の協力によつて資料の寄贈、寄託も増え、資料もかなり充実してきたが、道はなお遙かなものがある。今後ともに江湖のさらなる支援を得て、我々の目指す理想の館に向かつて前進したいものである。へきらびやかでもないけれど、この一本の手綱をはなさず、この陰暗の地域を過ぎる！その志明らかなれば、冬の夜を我は嘆かず、「寒い夜の自我像」とは、中原の、また我々の熱い志でもある。

運営協議会

委員に詩人・中也研究者ら

中原中也記念館の開館にあつて、記念館の運営の方針を決定する運営協議会が発足しました。

現在までに4回(年2回)の協議会が開催され、さまざまな課題が話し合われていきます。

運営協議会を構成する委員は、以下の通りです。

会長 佐藤 泰正(梅光女学院大学教授)

委員 北川 透(梅光女学院大学教授、詩人)

委員 佐々木幹郎(詩人)

委員 和田 健(山口県詩人懇話会代表)

委員 三好 郁子(山口詩話会会長)

委員 中原美枝子(遺族代表)

委員 井上 洋(山口市教育長)

委員 原 昌克(山口市経済部長)

委員 福田百合子(中原中也記念館長)

(敬称略)



『末黒野』は大正十一年(一九二二)に発刊された薄っぺらな合同歌集である。体裁は四六判、二十頁、ザラ紙に印刷され、吉田緒佐夢「木蓮集」、宇佐川紅萩「銀杏集」、それに中原中也の「温泉集」二十八首が収めてある。奥付などない。私の所蔵本には裏表紙の内側に一穂よりやや大きい印が押してある。「紅萩」と読める。紅萩とは宇佐川が初め短歌に用いた号である。

『末黒野』は詩人中原中也の文学への出発をうかがうことのできる貴重な文献として、私は長年秘蔵してきたが、二冊と現存しないようである。中也記念館に申し出で少数だが復刻版を作ってもらい、研究者の便に供することになり感謝している。

中也の短歌が防長新聞に初めて載ったのは、大正九年(一九二〇)二月十七日付で、十三歳の時と年譜にある。四月には県立山口中学校に入学している。中也は短歌の目を開かせたのは、小学校五年の時、山口師範学校付属小学校(当時、亀山の下にあった)の教生、後藤信一の

指導といわれ、得意気な短歌少年の姿がほうふつする。

そのころ県下には大した詩の雑誌もなく、防長新聞が唯一の詩歌の投稿場所であった。それも短歌や俳句が主であった。

詩が県下の文学青年の間に浸透しだしたのは、かつて河井醉茗の「文庫」で育った詩人の吉田常夏が帰郷してからである。ジャーナリストとして東都で活躍していた常夏は、大正十二年九月の関東大震災で住み家を失い転々としていたが、翌十三年(一九二四)、下関の関門日日新聞

掲載したが、いずれこの間の事情は次の機会に書きとめておきたい。

さて、その「詩園」第二巻第一号(昭和十四年一月号)に、宇佐川正明(紅萩)は山川千冬という筆名で「末黒野時代の回想―中原中也君のことども」という一文を寄せている。これを読むと出版の経緯がよく分かる。

そのころ防長新聞の歌壇は石川香村という敏腕記者が選を担当し、「県内外の群小歌人が雲の如く集り、さながら百花繚乱のありさま」であったとは、宇佐川の表現である。宇佐川は山口中学四年生、

寄稿

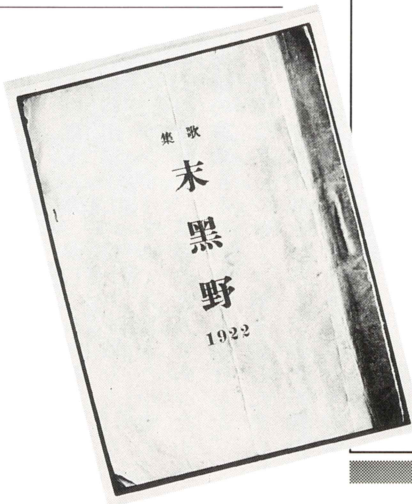
「末黒野」余聞

和田健

の社会部長兼文芸部長になって、文芸面に力を入れた。また自分の作品も載せ文学青年の文学熱をあおった。ほどなく病に倒れたが、再起し、昭和二年十月、西日本総合文芸誌「燭台」を発行した。

中也はずでに大正十二年(一九二三)四月、山口中学を落第し、京都の立命館中学に転校。郷土の文学運動には関係も縁もなくなり、短歌とも離れていった。常夏もこの天才詩人を知ることなく、昭和十三年十月他界した。

昭和十三年九月、私たちは中也の一周忌を期し、先達中也にあやかろうと詩誌「詩園」を創刊した。毎号中也の遺稿を



中也は二年生。自他共に許した若き情熱詩人、吉田(翠泡とも号した)は防長新聞社に勤め石川のよき補佐役として活躍していた。

『末黒野』は、宇佐川と吉田が意気投合し、なけなしの小遣銭をはいたもの

で、十円の印刷代は二人が折半し、二百部刷った。ところで宇佐川分担の頁が少しあいたので、「思索の揚句」(宇佐川の言)中也の歌を入れることになった。当時、中也に対する評価も扱いも、その程度だったことが面白い。

宇佐川に中也を紹介したのは、上田保という同級生。その上田の兄は上田敏雄。大道村(現防府市)の出身で、敏雄も保も大地主の坊ちゃんらしく、ダンディーな慶応ボーイ。後に二人とも詩人として活躍。特に敏雄は超現実詩派の旗手として、日本詩壇に名をとどめ、中原中也とも親交があった。

一冊の『末黒野』、中也がこの焼け跡から不死鳥のように青春詩人として巣立ったことは、私には奇跡のように思えてならない。(九六・二・一三)

※末黒Ⅱ「春、野の草木を焼いた後の黒くならないこと。」(広辞苑)



中也の軌跡Ⅰ・Ⅱ

開館後2回の企画展



開館した年の秋、記念館の空間の一部を展示会場として「特別展示 中也の軌跡」と題した小さな企画展を開催した。

第一展示は「故郷と生家―手紙をめぐって―」。筆まめだった中也にちなみ、手紙をキイ・ワードとして、中也とふるさととの関わりを生誕地ならではの品々によって表した。祖父政熊が初孫中也の名披露に知人を招いた手紙や、中也が故郷の母や妻にあてた手紙、薄墨で書いた親族への悔み状など非常に珍しいものも展示した。また、中也の結婚式の当日の旅館の献立表や実母フクさんの百歳のときの色紙などもあり、訪れた人たちの注目を集めた。

第二展示は「詩の遍歴―詩集で辿る詩人の足跡―」。山口で育った文学少年の中也がどのようにして詩人として成長していったのか……。ここでは中也に影響を及ぼしたと思われる詩集を通じて、文学上の遍歴を追ってみた。中学時代に投稿していた地元防長新聞「歌壇」のスクラップ帳やそのころ友人と出した歌集『末黒野』、処女詩集『山羊の歌』の印刷に使った紙型を紹介。高橋新吉『ダダイスト新吉の詩』や宮沢賢治『春と修羅』など、中也が出会った詩集の復刻版も展示した。

二年めとなった昨年の秋は、「中也の軌跡Ⅱ―上京・『朝の歌』のころ―」と題して、中也が上京して詩人としての本格的な歩みが始めるころにスポットをあてた企画展を開催した。

展示1の「別れ 富永太郎と長谷川泰子」では、中也の上京まもなく病死した友人の富永太郎、同じころ別離した恋人の長谷川泰子との関わりを取り上げた。とくにランポーをめぐる富永と中也の文学上の交友を、共通の友人であった小林秀雄の業績をからめながら紹介した。

展示2の「フランス詩を読むために」では、中原中也とフランス詩との関わりを、中也が学んだアテネフランセの資料や翻訳原稿などで展示した。

展示3の「スルヤ」では、音楽集団スルヤとの交流から、諸井三郎による「朝の歌」の直筆楽譜、「朝の歌」が歌われた演奏会についての当時の新聞批評などを、諸井家のご協力のもとに展示させていただいた。

また、同時開催の「新収蔵資料展」では、開館以来多くの方々にご寄贈・ご寄託いただいた資料の中から、直筆の原稿や手紙などを中心に展示した。とくに阪神大震災の災禍を無事にくぐりぬけて寄贈された詩「六月の雨」の原稿は、その後も話題を呼んだ。

収蔵品トピック

二つの署名本

「山羊の歌」

中原中也の処女詩集「山羊の歌」（文圃堂）は昭和九年十二月に初版二百部が刊行されました。このうち著者本人が署名して知人に送った署名入りの「山羊の歌」が、開館以後、二人の方から中原中也記念館に寄贈されています。

宮崎県在住の高森文夫氏は、高森文夫宛ての署名のある「山羊の歌」を寄贈されました。高森氏は中原中也の親しい友人として、中也が「山羊の歌」を編集する際の相談に乗り、詩集の題名の決定にも関わっています。戦前の第二回中原中也賞（現在の賞とは別）を受賞された詩人でもあります。

もう一人の寄贈者、福岡県在住の小笠原宮子氏は、小林秀雄宛ての署名がある「山羊の歌」を所蔵されていました。この本は小笠原さんの亡くなった夫が、文学を通じて交際のあった小林秀雄から、直接譲られたものだそうです。

詩集「山羊の歌」は発行部数が少なく、著者の署名入りとなるときわめて貴重です。愛蔵されていた大切な詩集をお寄せいただいたことに、改めて感謝申し上げます。

（詳細は「山羊の歌」初版の周辺 福田百合子「中原中也研究」創刊号に記載。）

中原中也記念館の記録

■平成四年

三月 中原中也記念館を生家跡に山口市が建設することに決定。

九月九日（～十一日） 記念館の基本設計を決める全国公開設計競技審査会
応募総数四七九件から最優秀に宮崎浩氏（東京都）が決定。

■平成五年

二月 建設工事着工

十月 建設工事竣工

十一月 展示工事着工

■平成六年

一月二十二日 佐々木幹郎氏講演「中原中也90―3」（平成DADA主催）

映画「眠れ蜜 第三部」（主演／長谷川泰子）上映

場所○ニューメディアプラザ山口

一月 展示工事竣工

二月十七日 開館記念式典

二月十八日 中原中也記念館一般公開

三月二十日 入館者一万人突破

四月二十八日 中原中也生誕祭 墓前祭／前夜祭（平成DADA主催）

場所○中原家墓所／ニューメディアプラザ山口

出演○伊藤比呂美ほか

四月二十九日 第一回運営協議会開催

中原中也生誕90―3年祭（平成DADA主催）

場所○高田公園

出演○谷川俊太郎、佐々木幹郎、伊藤比呂美、たま、サーカス団

六月二十八日 吉田武氏より中原中也直筆悔み状の寄贈

七月三日 中原中也「桑名の駅」詩碑除幕式（桑名市）遺族代表と館長参加

九月十三日 世界音楽祭「中也を唱う」（山口市主催）

場所○C・S赤れんが

出演○末廣正巳ほか

九月二十五日 第二回運営協議会開催

十月十三日 宮崎浩氏「中原中也記念館」で新日本建築家協会新人賞受賞。

十月十五日 中原中也記念館開館記念行事

俳優座公演「汚れつちまつた悲しみに……Nへの手紙」

場所○県教育会館ホール 昼夜二回上演

十月二十二日 中原中也命日墓参り

十月二十八日 入館者五万人突破

十一月六日 市民文化祭「それぞれの中也詩考」

場所○山口市民会館

十一月二十二日（～十二月二十五日） 特別展示「中也の軌跡」

■平成七年

二月十八日 開館一周年

第一回朗読詩大賞応募締切り（平成DADA）

二月二十八日 開館一周年記念 とんでもナイト 伊藤比呂美ライブ

主催○平成DADA・ぶちええ山口を広める会／共催 中原中也記念館

場所○ニューメディアプラザ山口

四月十六日 日本テレビ「知ってるつもり!?」中原中也特集放映

四月二十八日 中原中也生誕90―2年祭 墓前祭／前夜祭（平成DADA主催）

場所○中原家墓所／ニューメディアプラザ山口

出演○イブマリ・アリユ、大岡信、佐々木幹郎

四月二十九日 第一回運営協議会開催

中原中也生誕90―2年祭（平成DADA主催）

場所○維新百年記念公園野外音楽堂

出演○イブマリ・アリユ、大岡信、佐々木幹郎、吉増剛造、マリリア、憂歌

団、サーカス団、第一回朗読詩大賞受賞者

五月十四日 FBS「遠くへ行きたい」放映

七月十五日 服部金弘氏より詩原稿「六月の雨」寄贈

九月二十四日（～二十七日） 金沢・京都文学の旅（中原中也ゆかりの地）

十月十三日 中原中也忌 中也に捧げる詩（うた）・ピアノ

主催○平成DADA／共催 中原中也記念館

場所○県教育会館ホール

出演○高橋恵子、長谷川きよし、フェビアン・レザ・パネ

十月十七日（～十一月十九日） 企画展「中也の軌跡II 上京・『朝の歌』のころ」

十月二十二日 入館者十万人突破 中原中也命日墓参り

十月二十四日 永田光容氏より翻訳詩原稿「音楽堂にて」（ランポー）寄贈

十一月二十二日 第二回運営協議会開催

十二月二十日 第一回中原中也賞応募締切り

■平成八年

二月十八日 開館二周年

第二回朗読詩大賞応募締切り（主催 平成DADA）

二月二十五日 第一回中原中也賞選考会（東京・山の上ホテル）
豊原清明氏（兵庫県）の詩集「夜の人工の木」（霧工房）が受賞。

寄贈・

寄託資料から

開館以来、中原中也記念館にたくさんのご寄贈・ご寄託を賜りました。おもなものは次の通りです。

《寄贈》

原稿「六月の雨」服部金弘氏

翻訳原稿「音楽堂にて」永田光容氏

吉田進あて悔み状（墨筆）吉田武氏

「ランボオ詩集（学校時代の詩）」御庄博実氏

「山羊の歌」（署名入り）高森文夫氏

「山羊の歌」（署名入り）小笠原宮子氏

「在りし日の歌」中村稔氏

《寄託》

中原中也筆 竹田鎌二郎あて書簡

中原中也筆 竹田鎌二郎あて葉書

中原孝子筆 竹田鎌二郎あて書簡

青山二郎筆 竹田鎌二郎あて書簡

青山二郎「山羊の歌」表紙図案

中原中也フランス語家庭教師広告

外 以上、竹田巖氏

この外にも、中原家を始め、和田健氏、三坂幸子氏、中島信吾氏など多くの方々から貴重な資料の提供をいただきました。

また、吉竹博氏、中原豊氏、西郷竹彦氏、日本女子大学国文学研究室ほか、研究論文・著書をお寄せいただいた皆様にもあわせてお礼申し上げます。

どうもありがとうございました。

世中はイロイロキ

平成DADA実行委員会 竹花京子

「山口と聞いて連想するキイワードって、何でしょうかねえ」。そもそもことの始まりは、永遠の夢見る少年、永井健一郎氏（平成DADA会長）のこのひと言からだった。

「先日、和田勉さんの講演会を聴いて思ったことなんですが、たとえば鹿児島の子イワードは焼酎や桜島、博多だと山笠とか屋台といったふうに、山口の場合は何だろうって」。彼が遠い目をして話すときは、すでに何か思惑がある。

思い浮かぶものを並べてみたが、秋吉台、維新、山頭火、えーっと、ふぐ、ふぐ、ふぐ……ブチッ、ツーツーツーツー。何度やってもここで思考がはたと止まる。

「これからの山口のキイワードは、中原中也だと思うんですよ。今の時代に訴えかけられる何かが、中也にはある。幸い中也記念館もできますし」。頷きながら喋っている彼を横目に、「また過去の人の偉業に頼るんですか」と最初はボヤいていたが、ふと、数日前に見たテレビ中継を思い出した。

それは、アルペールビル・オリンピックピクの開会式の模様を生中継したもので、美しく幻想的なサーカスパフォーマンスに、夜明け前まで釘づけになった。その映像と中也が、このとき殆ど発作的に私の頭の中で重なり合った。

詩の世界にとどまることなく、中

也ならそのイメージから様々な表現手段が可能だ。しかも相手は全国区の天才詩人、「取り扱い注意」の人物だけに何をすることも当然質が問われるが、湯布院の映画祭のように本物志向でいけば、少々交通の便が悪くとも人は集まる。「中也でイベントをしましょう！」気がつくとい私はこう叫んでいた。まんまと永井氏の作戦にはまったのだ。

それから二人で下手な鉄砲を撃ちまくり、人集めをした。現在約十五名の同志がいる。もちろん全員手弁当での参加だ。

その同志に共通して言えることが、中也に精通した人間が誰ひとりとしていないということであった。マニアだと発想が偏るので、イベント作りには理想的な同志だ。専門的な部分はプロにまかせ、時代に柔軟な態度で（ミーハーな自分を忘れず）、中也を山口のメッセンジャーにしよう、という方向で皆が一致した。

怖いもの知らずの素人集団の強さか、夢がどんどんと現実のものとなっていく、「中原中也生誕九〇一（マイナス）3年祭」からカウントダウンされた生誕祭も、今年で3回目を迎える。

いつも見慣れた公園に、いきなり巨大テントが出現した1回目。夜の闇に浮かび上がるテントには空中ブランコの影が揺れ、不思議な歌声が響き、中也の残したことが音となって空気を振動させた。出演は、谷川俊太郎さん、伊藤比呂美さん、佐々木幹郎さん、「たま」の皆さん、



増剛造さん・マリリアさん夫妻、佐々木幹郎さん、「憂歌団」の皆さん、あらい汎さん、はるばるフランスからライブ・マリリアリユーさん、ミス・コレットさん、中国から王健さんが出演してくださった。今年も、俵万智さん、ねじめ正一さんが参加予定。朗読詩大賞の受賞式をはじめ、サーカス、ライブコンサート、詩の朗読といった異なったジャンルの出演者が、中也をキイワードにそれぞれの世界を舞台で表現してくれる。

ここで特筆したいイベントがもうひとつ。昨年十月、中也忌と銘打った催しで、歌手の長谷川きよしさん、ピアノストのフエビアン・レザ・パネさん、女優の高橋恵子さんが、今思い出しても身震いするほど素晴らしい舞台を見せてくださった。今年の生誕祭で、もう一度あのパネさんのピアノと出会える。

そして我々の活動の殆どは、詩人の佐々木幹郎さんの援護があつてこそ話。スズメの涙ほどのギャラで、「不可能」を幾つも「可能」にしてくださった。今年も力一杯お世話になる。

中也の親族でいらつしやる中原美枝子さんと伊藤拾郎さん、福田百合子館長をはじめとする中也記念館の皆さんのお力添えにも、心から感謝している。

幾時代かがありまして、
こうして世紀末の平成の世に、
中原中也は蘇ってきたのです。

サーカスの皆さん。
2回目の昨年は、場所を野外音楽堂に移して開催。この年から設けた「朗読詩大賞」で見ごと大賞を受賞したのは、阪神大震災に遭いその体験を詩に綴った小学1年の女の子だった。大岡信さん、吉

中也ゆかりのひとびと

第1回 三坂幸子

一番最初に歌会で一緒になったのが、中也さんが山口中学校の一年の時でした。場所は周慶寺という雪舟が築いたといわれる庭のあるお寺でございました。(編註 現在の善生寺)

本堂で、たくさん集まりましたね。中也さんが一番お若かったと思います。その次が私くらいです。

先生はあの毛利碧堂先生って長府毛利様のご当主で、そのころでいえば殿様です。それで会場に集まった連中が、みんな小さくなって黙ってるんです。けどね、中也さんは全然遠慮なさらないで、どんどんおっしゃるんです。「黙って聞いちゃったら、みんな長い柄のくわの先でチョコチョコとほじくるようなことでなんにもならん」って、おっしゃったんです。それでまあ、みんなが驚いちゃって。みんなから見れば子供ですからね。みんな自分のお弟子さんをもったお年寄りばかりでございますから。毛利碧堂先生とか、それから太田哀歌鳥、小川五郎さん、宇佐川紅菼。

周慶寺では二度くらい集まりがあつて、武学養成所でも、ございました。周慶寺よりもあとでございました。あれは女学校の四年の時。武学堂って、剣道やるところでなしに、寮があつたところです。大きな寮がありまして、そこでまた一緒にになりました。

周慶寺で、その日の選には席題と、前から宿題で出されていた歌題がありました。入った人の名前は書かずには歌の上へ点がつけてあります。その点を見れば誰のかつてのがわかるし、まあ、自分で見ればわかりますよね。で、中也さんは入ってなかったらしいです。小方さん

(編註 小方あきら、同世代の歌人)やら私やは、まあ数は少ないけど入ったんで、入った者だけちゃんとわかりましたからね。その会には和服で、はかまで出ました。中也さんは細かい縦縞の着物に、短い小倉ばかまをはいて、きちんとしてらっしゃいました。

歌会でお会いしたところは学校にも真面目に行つてらして、よくおできになつたようです。小学校の時もね。私が六年であの方が五年だったというのは後でわかつたんですけどね。そして中也さんは落第して京都へいらして、京都から今度はそこも卒業せず東京へね。で、私は中也さんは歌ばかりやつてらっしゃると思つたら、もういつの間にか詩をやつてらして、詩がかなりもう有名になつてて。

そのころの女学校に私の姪がおりましてね。それが、「中原、これはなかやつていうんですか」って言いましてね。教科書にあつたんです。いやいや、ちゅうやさんです、知っている人だつて言つてね。

科書にあつたんです。いやいや、ちゅうやさんです、知っている人だつて言つてね。

平成七年五月十七日

山口市内三坂家にて、抄録

(談)

三坂幸子さん

三坂幸子さんは大正九年、十三歳のころから歌を詠み始めました。防長新聞の歌壇に投稿し、山口で開催される短歌会にも出席。防長新聞紙上で中原中也の名を知り、短歌会で幾度も同席しました。山口県立師範学校付属小学校の同窓会幹事会でも会をともにし、小学校の「校友會誌」で、中也が一学年下の同窓生だったことを知ります。歌会の批評について中也から手紙を受け取ったこともあるという三坂さんは、戦中戦後を過ごした今も、当時の防長新聞短歌欄の切り抜きをスクラップ帳として所有されています。当時の歌会のプリント等を記念館に寄贈されました。

この欄では、地元にお住まいの中也と関わりのある方々にお話をうかがい、記念館で編集したものを連載いたします。取材にあたっては、和田健氏のご協力をいただきました。

点訳図書の寄贈

山口県点訳朗読友の会

平成七年十一月二十九日、山口県点訳朗読友の会(代表、林トクエ会長)のみなさんが、中原中也の詩集などの点訳を中原中也記念館に寄贈され、山口市役所で福田百合子館長に手渡されました。

寄贈された点訳図書は、中原中也の詩集「山羊の歌」と『在りし日の歌』、訳詩集「ランボオ詩集」の合わせて四巻、それに中原フク述「私の上に降る雪は」六巻の合計一〇巻(巻数は点訳図書の都合)です。

同時に、希望者向けにご寄贈いただいた点字のしおりも好評で、三百枚余りが年内になくなりました。

さらに、平成八年二月二十一日には、英訳された中原中也の詩集「The poems of Nakahara Chuyal」二巻の点訳を寄贈していただきました。

山口県点訳朗読友の会では、視覚障害者に限らず多くの方々にご覧いただき、点字についての理解を深めてもらいたいと希望されています。

現在、これらの図書は記念館の閲覧室に備えてあり、どなたでも手に取ってご覧になることができます。みなさんのご利用をお待ちしています。



★第一回中原中也賞決定！

豊原清明さん

「夜の人工の木」に

二月二十五日、第一回中原中也賞の選考会が東京都内のホテルで開かれ、応募総数三百四十一点（公募三百十九点、推薦二十二点）のうち最終選考に残った七点について協議されました。その結果、兵庫県神戸市の通信制高校生、豊原清明さん（十八）の第一詩集『夜の人工の木』（霧工房）が選ばれました。贈呈式は四月二十八日、ニューメディアプラザ山口で行われます。

受賞者の豊原さんは昭和五十二年六月二十五日生。一九九四年度中野重治文学奨励賞（福井県丸岡町主催）を受賞。現在同人誌「現代詩神戸」「火曜日」などに所属して、創作活動を続けています。若い詩人のこれからの活躍が期待されます。なお、選考の経過及び受賞詩集のおもな作品は「ユリイカ」（青土社）の四月号に掲載されます。

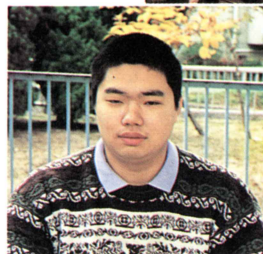
第一回中原中也賞の選考委員は次の各氏。

荒川洋治／北川透／佐々木幹郎／佐藤泰正／中村絵／吉田熙生

（五十音順、敬称略）



館長（中央）から花束を受ける豊原さん（右）
左は中也の義妹中原美枝子さん



豊原清明さん

受賞詩集
「夜の人工の木」



●受賞者の談話

うれしいです。びっくりしています。中原中也の詩集には中学二年生の時に出会いました。題名はすぐに思い出せませんが「トタンがセンベイ食べて」で始まる詩（「春の日の夕暮」）に特に思いを寄せていました。

とにかく今はびっくりしています。ありがとうございます。

中原中也生誕90-1年祭

中原中也の誕生日である四月二十九日、恒例となった中原中也生誕祭が、今年も山口県維新百年記念公園の野外音楽堂で開催されます。

中原中也が誕生して八十九年めにあたる今年は、生誕90-1年祭として、ゲストに依万智さん、ねじめ正一さん、佐々木幹郎さん、フエビアン・レザリパネ、ピアノトリオ、KOUJIさん、張静（チャン・チン）さんらをお迎えします。前売券は三千円（当日四千円）です。

お問合せは、左記まで、
〒七五三 山口市今井四一二一

ラゲタイム気付
平成DADA実行委員会事務局
☎0839-2516843

第2回 朗読詩大賞

前年に引き続き、市民グループ平成DADA実行委員会の主催で、自作の詩を朗読したテープで審査する朗読詩大賞が募集されました。二月十八日の締切りまでに、全国から約百三十点の応募がありました。

詩人の佐々木幹郎氏と平成DADA実行委員会の審査により、三月下旬に大賞及び一般部門とジュニア部門の入選者が選ばれます。受賞者は、四月二十九日の生誕90-1年祭に招かれ、受賞作を朗読することになっています。

編集後記

開館して二年余り。記念館からの情報発信の一つとして、館報の発行をずっと願っていました。未熟ながら形にすることができ、ほっとしています。創刊にあたってご寄稿を願った三人の方々には開館準備の頃よりひとかたならぬご厚情を賜ってまいりました。当館の運営がまがりなりにも軌道に乗り、館報の発行という一つの節目にこぎつけることができましたのも、これまで記念館を支えてきてくださった皆様のおかげと感謝しております。さて、創刊号はいかがでしたでしょうか。皆様のご意見、ご感想をお待ちしております。

編集委員 福田祥介
和木浩子
那須香

●発行

中原中也記念館 館報 創刊号 平成八年三月三十一日

TEL(0839)3316430
FAX(0839)3316431
〒753 山口県山口市湯田温泉1-1-1